

Title	展覧会の絵
Sub Title	Mr. Moriya in the museum
Author	青柳, 瑞穂(Aoyagi, Mizuho)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1968
Jtitle	哲學 No.53 (1968. 9) ,p.355- 358
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	守屋謙二先生古稀記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000053-0361">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000053-0361</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 展 覧 会 の 絵

青 柳 瑞 穂

絵をみるのが好きだから、展覧会にはよく出かける。

西洋の世界的な大家や、日本の有名画家の展覧会と言うまでもないことながら、あまり名の知られてないような画家の絵に接するのも悪くない。あまり名の知られてないといったところで、東京の、たとえば銀座あたりの画廊であってみれば、たまたまわたしはその画家の名前を知らなかっただけのことで、その道では一応名のとおっている作家にちがいなかるう。

その道では名が知られているにせよ、それに接するわたしには初めてであってみれば、やっぱりわたしには無名の画家であることにかわりはない。

だから、わたしはなんの先入観念もなしで、そこにかけられた花や鳥や人の絵を鑑賞することができる。そして、そこに、その人独得のかくされた美しさを見出しでもすると、そんな時、わたしは絵をみることの喜びをつくづく感ぜずにはいられない。

まあ、そんな点で、ピカソだのマチスだのとくれば、こっちはただその重量に圧倒されて、ただただ感嘆するばかり、新発見どころのさわぎではないので、なにか自分の出る幕ではないという気味さえして、面白くもないといえ、いえないこともなさそうである。

ちかごろ、絵の展覧会も、個展ならオープニングというのがはやり、官立の博物館や美術館では、ちょっとがらにもなく、招待日はレセプション付きである。これはきっと主催者側の新聞社の厚意かも知れないが、どうもわたしはどっちもあまり賛成ではない。もともと、わたしは展覧会の空

## 展覧会の絵

気は、ひっそりしたものであってほしいのである。展覧会とはそんな姿がほんとうのような気がしてならないのである。新聞者が主催であってみれば、前庭は自動車ですずまり、会場がごった返すのも是非ないことながら、なんといったところで、これは絵画というものの、あまり上等な鑑賞の場とはいえない。

理想的には、個展なら、あまり広くない会場に、ほんの2、3の人影がゆれている程度でありたい。そして、不遜のこと言わしてもらえば、当の絵かきさんには会場にいてももらいたくないのである。ささやかな、気持のいい展観であればあるほど、その主人公の存在が妙に拡大されるので、落ち着いて、その人の作品を、その中にまで滲み入って、みることができなくなるからである。いわんや、どうもそれを画いた当人らしい人物が、それを見に来た客に自分の作品の説明をしている場面などに接すると、ゆっくりそこにはいられない気がして、そうそうに退却してしまう。

そのくせ、その絵かきさんが、自分の知っている人ででもあると、わたしもつい椅子にかけて、かれと世間ばなしなど交すのだが、新たに入ってきた、画家を直接には知らないらしい観客の手前、わたしとてやっぱり気がひけて仕方ない。

知らない客こそ、画家にとって、いちばんうれしいのではなからうか。

それなのに、その知らない客は、当の画家が知人たちと愉快そうに談笑し、茶菓や酒類のもてなしなどがされているのを見ると、作品を鑑賞する楽しさもそぐなわれて、自分はそうそうに引きあげざるを得ないというのも、まれではないと思う。

画集を操る気持というのは閑かなものである。気に入った絵がでてくると、しばらく、手をやすめて、ページの中に沈んでゆく。それから、夢からさめたようになって、また繰ってゆく。画廊でもあんなひそやかな気持で、歩をはこびたいものである。

だから、それが広い会場だったら、知っている人の姿をみかけても、そ

ばによってはなしかけることを避けるようにしている。わたし自身も絵を  
みながらの会話はあまり好きではない。

せんだって、上野の西洋美術館へ、ポナールを見に行き、守屋謙二  
さんをおく見かけた時など、かけよって、あいさつをしたい衝動にから  
れたが、それをやっておさえたくらいだった。それというのも、守屋さん  
は慶応の文科で、わたしの先輩であるにもかかわらず、まるで友人のよう  
なおつき合いをねがい、ともに日本の古い器物や、絵画を玩ぶという同じ  
道楽を持っているだけに、親しみをいただいていたからだった。その守屋さ  
んが先年、脳溢血で倒れたときいて、ただ遠くにいて憂っているだけだっ  
たのに、はからずも、こうしてご元気な様子を見て、わたしはかけよりの  
たかかったのだが、あえてそれをなし得なかったのは、場所が展覧会場だっ  
たからだった。守屋さんの鑑賞をお邪魔したくなかったからだ。健康を回復  
されたのは何よりおめでたかったが、とくべつうれしかったのは、あの手  
押車に悠然と乗っていられたことだった。美しいものを見るには、あんな  
恰好がいちばんふさわしいのではないかと、ほんとにうらやましいくらい  
だった。

子供の頃、わたしの家には父専用の人力車があって、父は東京に行くとき  
は、いつもこれを甲府の停車場まで利用していた。わたしも母が近在の  
親戚などに行くときは、母と相乗りさせてもらったものだが、そんな時、  
いつも自分の走りまわって遊んでいた田舎の野原や川辺も、この人力車と  
いう少し高いところから、自分の足を使わずに、らくらくと眺めると、そ  
れが一段と美しい、楽しいものに映ってきたものだった。わたしはポナ  
ールの田舎を描いた風景などを眺めながら、この少年の日の人力車を思い出  
して、わたしも守屋さんのようにあんな手押車から眺めたら、ポナールの  
田舎の景色はもっともっと深く理解されるのではないかと思わずにはいら  
れなかった。

いつだったか、銀座で雨におそわれ、思わずとび込んだのが画廊だっ

## 展覧会の絵

た。小っぼけな、まだわたしが足をふみ入れたこともないうちだったが、そこにほんの十点たらずの油絵がかけてあったので画廊とわかった。もとより、絵を見るためではなくて、雨宿りのつもりだったが、主人の画家も、みる人もいないし、まるで貸室かなんぞのようにならんとしていたので、なにげなく、そのなかの一点の前に佇んでみた。わたしはよく知らないが、六号というほどの大きさであろうか、それに一株、ケヤキだかマロニエだか、そんな落葉樹が描いてあった。というのは、樹木にはおおかた葉っぱがなく、その葉っぱは、地面や、かたわらのベンチの上に散りしいていたからだった。とくべつに目をひくほどのものではなかったが、たまたま雨でまぎれ込んだようなこの人気ない夕方の部屋に、この絵を見出して、なにかわたしもほっとした気持になったのである。なによりも、樹木に寄りそうようにおかれたベンチがとくべつ可愛い。たわいなく散りしきる木の葉を自分ひとりで抱きかかえようとしているように見えるのに、そうもいかず、ありあまった木の葉は地面にもこぼれている。

思わずわたしも部屋にあった椅子をその絵のかたわらに引きづってきて、その樹とならんで腰かけた。

あれは何年前のことだったろうか、ふしぎとあのさびしい絵が忘れられない。